

2019 年度立命館附属校 教師塾Ⅶ

—研究授業・研究会への参加成果報告会—

附属校教育研究・研修センター

11月12日（火）朱雀キャンパスにおいて、附属校教育研究・研修センター主催の教師塾Ⅶを実施した。

今回は、教師塾Ⅳで受講者各自が附属校を含む他校の研究授業、研究会に参加し、学んだ内容の共有化を図る成果報告会を実施した。授業改善の教科の枠を超えた取り組みや各教科の授業内容を知る機会となった。

今回は、教師塾受講生13人（立命館小学校2人、立命館中高1人、立命館宇治中高2人、立命館慶祥中高2人、立命館守山中高6人）とコメンテーターとして一貫教育部から小学校、理科、保健体育の教員も参加した。

《受講生が参加した研究会などの一覧》

校種・教科など		研修先	実施日時
小学校		京都市立東山泉小中学校教育研究会	10月26日
中学校・ 高等学校	社会、地 歴・公民	立命館小学校社会科授業研究会	11月2日
		奈良大学学校教員支援オープン講座GIS講座	7月31日
		北海道社会科教育研究大会	10月18日
		立命館高等学校 公開授業研究会	10月11日
	理科	京都理化学協会研究協議会	9月27日
		立命館附属校・提携校 理科公開授業研究会	10月4日
		京都産業大学附属高等学校 授業見学（生物）	10月8日
	保健体育	立命館宇治高等学校 授業見学（女子柔道）	9月26日
	英語	立命館中学校・高等学校 公開授業研究会	6月20日
	養護教諭	大阪府立西野田工科高等学校養護教諭（保健室）訪問	9月9日

《発表内容と質疑応答など》

1 小学校

①発表概要

小中一貫の義務教育学校である京都市立東山泉小中学校の研究公開に参加したことについて発表した。算数の授業では、学力差を埋めるための工夫がなされており、道徳の授業では、自分の意見を持ちやすい工夫がされていた。また、立命館と東山泉とを比較し、両校の違いについて発表した。

②質疑応答

コメント：義務教育学校ということで見学する学校を決められたと思う。具体的に算数と道徳の一般的な対応についてお話いただいたが、小中連携の教科指導の在り方も伺いたかった。算数は5年生を見学されたが、教科別になる6年生以降でどのようにされようとしているのか、或いは先生自身が立命館小学校と比較しながら小中連携の面でどう考えられたのかを聞いたかった。道徳については3年生と6年生を見学されたが、区切りの違う授業（6年生から中学校へ移動）の在り方についてもお話しいただければと思った。



応答：算数は授業で人間関係を作り上げていくことを大切にしていた。小学校からそのまま全員同じ中学校に進学することに対応していた。道徳はどちらもネームカードで意思表示をし、モラルジレンマもどちらも活用していた。3年生は学級単位で6年生は学年単位で実施していた。小学校から積み上げてきた学習を6年生（中学校）は授業の形態を変えて実施され、学ばせていただいた。

質問1：道徳で教科書の活用は。

応答：小学校は利用しているが、途中で中断し、考えさせていた。中学校はオリジナル教材（奇跡の生還）を使用し、必要に応じて教科書資料も活用されていると思う。

質問3：5年生の算数の机の並べ方「コの字型」はどのようなであったか。学びの共同体の考え方からか。また、発達障害者への配慮はあったか。

応答：「コの字型」をスタンダードにしていた。授業者に未確認ではあるが、対人関係でストレスを感じ児童に対して端の方に机を置き、不必要なプレッシャーを取り除いていたようであった。

2 社会

①発表概要

1)立命館小学校社会科授業研究会に参加した。

小学4年生の主にプラスチックゴミの行方について考察させる授業であった。奇しくも同じ時期に、私は高校でプラスチックゴミの対策について議論して検討する授業を行っていたため、異年齢によるテーマに対する教え方の違いを見ることができた。そこで感じたのは、発達段階は異なっても、主体的に考えさせようとする本質は同じであるということである。しかし、だからこそ小学校での丁寧な議論運営が、私にはより強調されて映った。またその運営方法は、高校生の段階で議論が行き詰った際にも、有効な手段となり得るのではないかと感じた。

加えて、ICTの活用は、立命館小学校の方がより先進的に行っているため、これを経験した生徒を立命館中学校・高等学校に進学した際にどのように指導を行っていくかを考えないといけないと感じた。ICTの活用方法によっては場合により時間の確保が難しくなる「対話」の部分、より積極的に取り入れた授業展開が必要になってくると感じた。

2)奈良大学学校教員支援オープン講座（GIS講座）に参加した。

今回は授業方法ではなく、GISの使い方という非常に実践的な研修であった。学習指導要領の改訂で、地理が数十年ぶりに必修科目に再登場する。現場に地理専門の教員が極端に少ない点、PC環境に格差がある中で、GISがどれだけ進むのかは未知数である。奈良大学の実習で身につけたGISの活用法は、ひとまずPCが使える環境があれば、ボタン一つでできるものである。従来の紙の地図とGISを合わせた授業づくり、また、他教科との連携で必修になる地理の学習を豊かにしたい。

3)第72回 北海道社会科教育研究大会に出席した。この研究大会のテーマは、「深い学びとは何か」というものであり、その内容に即した研究授業を見学した上での感想・考察をまとめた。生徒たちに自己内省・他者の意見の吟味という過程は必要であり、その結果を踏まえた自分の意見の発表を行う学習に大きな問題は感じないが、この過程にどのような評価をつけるかが大きな問題であると考えた。表面上に出てこない思考の深さに評価をつける方法を考える必要がある。

4)立命館高校公開授業研究会に参加した。3年生国際文系クラスの世界史4単位の公開授業を見学した。見学した授業は通史を一切行わない授業であった。世界史であっても、地理や現代社会、地政学を踏まえた授業を展開していた。各テスト期間にテーマを設定し、初めの12時間程度は授業を行い、残りの5.6時間でテーマの探究を行い、発表するという授業スタイルであった。

今回のテーマは「この先15年間、日本はどのように動くべきか ～中国を地政学的に考える～」であった。これからは探求型の授業になっていくが、限られた時間の中で、知識の獲得、評価の在り方など様々な課題を解決しないといけないと改めて感じた。

②質疑応答

質問1：社会科で探究活動を行いながら、教科書は1年間で終わるのか。探究のテーマの設定は

どうする。

応答：全ては網羅できない。守山では世界史 A の領域で探究活動を行い、世界史 B へもどる実践を行っている。宇治では地理 B の中で、地理総合とのマッチングするところで行っている。過半数が外部受験を行う立命館慶祥では各教員ができるところまで可能な限り進める。

質問 2：世界史で探究を行う際、世界史の学習からかけ離れたテーマで探究を行っていないか。

応答：知識を使って総合的に考えているため、大きな意味では世界史の範囲のテーマである。また、教科書も応じて変わってくるのではないか。

質問 3：探究はいいが、基本知識はどう押さえるのか。

応答：段階別で指導してはどうか。中学で基礎知識を広く浅くつけ、高校でその知識を深めるなど。

コメント：探究活動をするには深い知識が必要になる。しかし、授業時間は限られ、現実には学習範囲を終わらせることが精いっぱい状況がある。これから探究の時間をどうやって確保するかが問題になってくる。これからは知識の習得と探究活動のバランスを考えないといけない。

また、先ほど言われていた「答えのない問い」は答えがないわけではなく、正解がいくつかあるということである。人それぞれが正解を出せばよいが、いろいろな人と意見交流したりいろいろなところに出かけたりして最適解を見つけていけばよいと思う。

理科

①発表概要

1) 京都理化学協会研究協議会で「簡単な実験を通じた探究活動の実践」について学んだ。

勤務する立命館中学校では、来年度新入生から内部進学者と中学受験による外部進学者が混ざったクラス構成になる。学びの過程がことなる生徒たちの評価をどうすべきかをどうするかが課題である。そこで、探究活動を通して、教え合い・学び合いの過程を評価に入れることで、両者の得意な部分を引き出し伸ばすことができると考え、今回参加した。

研究協議会では講師の方から、短時間でも議論する時間を確保する大切さ、探究活動を投げ込み教材ではなく授業で取り扱う単元に合わせたものであるのが望ましいことを伝えていただいた。活発な探究活動には基礎知識を持っている必要があるとも伺い、基礎知識の獲得をどうすべきかを考えさせられた。

2) 立命館守山中高の理科公開授業研究会へと参加した。対象学年は高校 2 年生で、化学分野と生物分野の課題研究を行う初回授業を見学した。

授業内容は、生物はカイワレ大根の育成条件について、化学は実験器具の取り扱い方についてと異なっていたが、ICT の活用によって、情報共有・発信ともに非常に活発に行われていた。今回参加することによって ICT の活用・試行実験の導入方法など多くの学びが得られた。

3) 京都産業大学附属高等学校の他大学受験クラスの生物の補習授業を見学した。在籍校と共通している直面する問題点や課題について意見交換した内容を発表した。

教科指導において授業者は「理科離れ」の中でも生物は敬遠されがちであると言われ、教科書の内容だけではなくできるだけ教員自身の実体験に基づいた話をするように心がけていた。私は、目に見えない現象や構造をイメージするために動画や実験を通して体験的に専門分野を学ぶことが必要不可欠となると考えた。

当該校では内部進学コースと他大学受験コース間で授業スピードと内容・レベルの設定が難しいとのことであった。さらに限られた教員数でタイトな年間授業数の中にいかに実験を入れながら授業を進めていくのが重要なポイントとなっていた。内部推薦者には、高大連携で大学授業の受講、1 月以降の大学入学前課題を課すことでモチベーションの維持に努め、他大学受験者には補習で進路実現の努力されていた。

②質疑応答

質問 1：実験技術を身につけるためには他の教員から学ぶことも大切であるが、附属校では、校内でどの程度、他の教員の実験を見たりすることがあるか。

応答：綿足の在籍校では公開授業週間が設定されており、その場を利用し他の実験を見ることが多い。さらに、常に実験を見合う習慣があり、いつでも授業に入り見られる環境はある。ただ、中高間の交流は少ない。

質問2：視察校（京産大附属高校）における非常勤の比率が高いようだが、会議等はどう行っているのか。

応答：週一度の教科会を行っているようである。欠席した場合には情報共有を行える環境がある。常日頃から、情報共有は行っているようである。

コメント：探究活動で考えさせることをどう評価するのかという点は生徒に発表させたり、ルーブリック評価などの活用で評価するしかないかなと思う。しかし、自分一人で本当にこれでいいのかなと考え、評価することはかなり難しい。やはり教科会、校内の研究会で議論すべきではないだろうか。文科省や他の研究会からの情報も必要だが、自分たちはどうするんだということを考えないといけない。

それと同時に大学に進学した時にこんな知識を知らないのかといわれないように、考えさせることも大事だが基本知識の獲得も必要である。

大学にも生徒たちにこんな力を伸ばしたことを伝え、もっと伸ばしてほしいと伝えるような大学との連携も今後必要である。他教科も交え、意見を交換していきたいものである。

保健体育

①発表概要

立命館宇治高校1年の女子柔道の授業を見学し、生徒の心をつかむ指導と、学ぶ空気を作る授業の感想を伝えた。見学した授業は身体測定直後でフワフワした気持ちで生徒は授業に臨んだ。しかし、生徒は授業担当者の凛として雰囲気を感じ、すぐに授業に向かう姿勢をとるようになった。体育の実技は座学と違い、生徒は動きと授業空間も広い。その中で生徒が安心して授業に向かえる状況を作ることは、怪我の防止のためにも必須となる。見学させていただいた授業担当者のように大きな声も出すこともなく、生徒が授業に向かう姿勢をなす指導力は、他教科でも必要であると考えた。

②質疑応答

質問1：授業環境を作る際の、教員立ち振る舞いはどのようであったか。

応答：正座して一言も話さずに生徒を待っていた。授業規律の徹底し、約束ごとを作り実践していた。

コメント：体育科教育学の世界ではよい体育の授業について数多く研究され、基礎的な条件と内容的な条件について一定の法則があることが分かっている。見学された先生は基礎的な条件を理解されている。何を学ぶのか、どうやって学ぶのか、どうフィードバックをかけるのかなどの内容的な条件も含めて認識を高める必要がある。同じ学校の体育の先生と共有しながら授業を見合っ、見る観点を決めて協議されると急激に力がついていくと思う。

もう一点は、空気を作るなどの学びに向かう力の育成はどの教科にも言えることだが、体育と道徳は学びに向かう力と人間性の育成が学習内容として学習指導要領に明記され、教えないといけない。こういった教材を使って何を教えていくのかを明確にしていきたい。また、評価は必要で、この力がつけばどうなのかということ先生だけの評価だけでなく、生徒を含めて他者評価も取り入れて検討していただければと思う。

英語

①発表概要

1)立命館中高公開授業研究会での英語科研究授業を「主体的、対話的で深い学び」から分析し、その実践例を発表した。

英語科の学習指導要領が英語4技能から英語5技能（やりとり・発表・読む・書く・聞く・話す）に重点が変更された今、自分の伝えたいことを英語というツールで表現できるような生徒を

育てていく必要がある。また「教科横断型学習」をベースとし、他教科での学習知識のアウトプットを意識したインプット活動が重要となってくる。

2) 立命館中高の英語研究授業での授業実践を、新学習指導要領でもキーワードとなっている「主体的、対話的で深い学び」から分析し、その実践例を発表した。

見学した授業は、生徒の主体性を引き出すために生徒目線で問題提起がなされていた。生徒の身近なところに問いを落とし込み「話したい・伝えたい」の気持ちを掻き立てていた。また、「教科横断型学習」をベースとしており、英語をツールとして利用して他教科での学習知識をアウトプットする活動（健康を取り上げ英語で内容理解から発表まで行う学習）を行っていた。生徒は既存知識を使い、それを深めることで、「知っていることを伝えたい」というモチベーションを高めている。

対話的で深い学びについて、相手の意見を踏まえた上で自己の考えを整理するよう工夫をすることで生徒の「考えを深める」ことを可能にしていた。

② 質疑応答

質問1：オールイングリッシュでの膨大な量の情報に生徒は混乱しないか。

返答：生徒は、はじめは対応できないが徐々に慣れてゆき、かなりのスピードのある英語でも対応ができるようになる。若さ故の対応力の速さも期待できる。

感想：英語をツールとして社会科で教科横断的な授業が展開されているが、英語科から社会科の知識がもう少し欲しいといわれている。社会科の中でも各科目を横断的にすれば知識が深まるのでは思う。また、身近なトピックスを取り上げているが、生徒の興味・関心が薄いようで悩んでいる。

質問2：考えを深める工夫としてペアワークやグループワークが取り上げられていたが、クラス全体で意見をシェアする場面はあったのか。

応答：全体でも共有化する時間はあった。ペアで話した後、先生が学習した内容を質問形式で生徒に発言させていた。

質問3：中学校の実践ではジグソー法のようなものを実践していたのか。

返答：ジグソー法ではなかった。

養護

① 発表概要

大阪府立西野田工科高等学校への保健室訪問の報告を踏まえて、保健室来室の実態や現在の生徒の課題を明確化した。また、学校に求められているニーズの変化と多様化に対する支援の方策を提案し、保健室でのアセスメントの重要性を報告した。

② 質疑応答

質問1：立命館小学校では日々30名ほどの児童が保健室を利用しているがその数は全国的にも多いか。また全国平均は来ただけでカウントを行なっているのか

応答：来室のみでカウントを行なっている。同規模の全国値では20名なので多い方ではないか。

質問2：私立では手厚いサポートを求め入学する保護者および生徒も多い。これは今後も増加する可能性は高い、これからの保健室はどう対応するか。

返答：養護教諭としての仕事としては何がその生徒に必要なかのアセスメントが重要。そこから専門家などに委ねる判断も今後重要となるだろう。

(記録 立命館守山中高 山内 優馬)

(編集 附属校教育研究・研修センター 羽田 澄)